
機動戦士ガンダム <種と覚悟が運命に惹かれた時>

焔の錬金術師ラビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム<種と覚悟が運命に惹かれた時>

【Nコード】

N6643Y

【作者名】

焔の錬金術師ラビ

【あらすじ】

俺達はそれぞれ覚悟を持って、この戦場に踏み入れる。

『戦争』のない世界のためにまた世界は、『戦争』を始めようとしていた……

軍

憂鬱だ、俺はそう思っていた

俺、蒼神あおがみ 恭はきょう

モビルスーツ操縦者育成機関の高等部に所属している

いま、この世界では

プラント、オーブ、地球連合、A E U、ユニオン、人類革新連盟の
6つの国家群が

国をそれぞれ治めている

その国家群でプラントと地球連合は長い間互いを

反発しあっていた、プラントは義勇軍であるザフト軍を動かし
地球連合軍もそれに対抗していた。

噂ではプラントは遺伝子操作で組み替えた人たちを『コーディネー
ター』と呼ぶとか・・・

真実はまだ闇の中、もしかしたらおれ自身もコーディネーターなの
かもしれないし、

そうじゃないかもしれない。

オーブは6つの中で中立の道を選んだ国家、他国の戦争に介入せず
他国の戦争に干渉せず、それがオーブの選んだ平和への道。

人類革新連盟はA E U、ユニオンと、すこしぎこちない関係で
たびたび争いを繰り返している、そのなかで彼らは孤児などを
拾い、人体を改造した『超兵』を生み出すことに成功していた。

「そんなんで、ホントに平和が築けるのかねえ・・・」

俺は授業が終わり、バックに荷物を入れながら呟いた。

何の教科もパツとしないが俺が、いや、俺と悪友の咲神 ヒロキ（

さきがみ ひろき）

が唯一輝ける分野がある。

モビルスーツの操縦技術、俺とロキ（ヒロキの愛称）は直感的にこれに長けていて、模擬戦闘でもたびたびみんなを驚かせていた

だが、これがいつか戦争に使われると思うとゾッとする。

そして、戦争は今も起こり続けている。

ここはその戦域から離れているが、俺の住んでいる町は、プラントにある。

対してロキはオーブに実家がある。

この国家がお互いに機密事項を持つてるため

それぞれ極力近づけないようにされる。

そして、モビルスーツの性能実験

俺たちはというよりプラントにある居住区やオーブにある居住区ちかく当然

そついった実験などは一切しない。

どこか秘密の場所できているらしい。

なるほど、これで機密が守られている？のか。

「でも・・・近いうちにプラントに戻されるんだろうなあ」
ここ最近戦争は過激化、ここの機関も危ないということ
それぞれの国家は、その生徒を自分たちの国家で教育する。
などと抜かしやがった。

とうぜん彼らとの接触は禁止、接触しようものなら機密違反で捕まり下手したら射殺だ、最悪にもほどがある。

そして、思いのほかそれは早まっていた。

プラントから呼び出しがかけられた、ロキもオーブからかけられて

いたし

それぞれもう自分の国家に呼び戻しを始めたのだ。

『これ、やるよ』

そういつてもらったのは、鍵

『その鍵、俺の秘密の宝物の鍵なんでぜ？意外にお守りになるし、あげるよ』

分かれる際、ロキから貰った鍵

だから、俺もお守りを渡した、一発の弾丸を

『この弾丸、俺の使ってる銃の弾だから、お守りになると思う』

そして、別れを告げた。

すでに、俺はザフトに入れられるようで、もう手続きがしてある。

軍といつたって俺はまだ学生、そう思っていた。

だが、予想以上にそれは厳しいものだった。

銃の扱いは教育機関でハンドガン程度なら扱えたが

本格的な機関銃の扱いや、モビルスーツに実際に乗せられ適性試験を受けさせられたり。

学生のもりだったのだが、俺はもう、『軍人』とみなされていたようだ。

だが、俺は戦争のない世界を望む一人だ、このくらい耐えられる。

適正の結果は1週間後に届くらしい、それまでは実家でおとなしくしてるといわれた。

「ロキ・・・あいつもこんなことやってんのかなあ」

俺は自室のベッドに寝転び、そう思いながら眠りに落ちた。

軍（後書き）

いやあ、思った以上にぐだぐだでwww

ちよっとお叱りを受けてしまったので

かなーり書き直しましたwww

でもまあやっぱりアドバイスは嬉しいです！

ですので・・・もうちよっと優しくお願いします（泣

登場人物紹介

2 話目なのに紹介!?

と、思う方が多いと思いますが、これは作者の僕の
不祥事なので・・・ごめんなさい!!
では!レッツラゴー!!

あおがみ
蒼神 恭

性別 男 15歳 所属軍 ザフト

つねにヘラヘラしている少年、だが、自分のやるべきことは
何があっても貫く。

『超絶』を口癖にしており、ふざけているときは一人称がメチャク
チャになる

普段はコンタクトをしているが時々眼鏡になることもある。

『戦争のない世界を作る』と覚悟を決めて戦場に踏み入れる。

生まれつき脳量子波が高く、そのせいで左目が金色に変色している。
それをカラーコンタクトでいつも隠している。

ちなみに脳量子波が使えることはみんなには黙っている。

性格は臨機応変に立ち回ることが出来るが自分の感情を中々偽れな
い。

いつもふざけた言動をしているがその中で仲間同士をくつつけるこ
とに努力している。

咲神 ヒロキ（さきがみ ひろき）

性別 男 15歳 所属軍 オープ

いつも笑顔な少年、蒼神とは幼少の頃からの仲間だが
すんでる場所から彼らは敵対する。

性格はまじめ、だけどそれを表に出そうとはせずいつもはぐらかす。
しょうしょう卑猥な発言が多く見られるが、周りはそんな彼を
嫌うことはなく、むしろ好印象に思われている。

争いはあまり好まず、『戦争のない世界』のために戦場に踏み出す

ラウラ・セイ・ブラッド

15歳

性別 女 所属軍 人革連

生まれ持って脳量子波が高く、人革連の超兵の実験もクリアし
完璧な超兵の1号とされているソーマ・ピーリスに続く
完璧な『2号』となる。

性格は戦闘中は植えつけられた戦闘本能むき出しの人格が現れるが
本来の人格はとても心優しい、そして、それを回りに知られたくな
いので

常に周りを冷たい目線で見下している。

須藤 唯すどう ゆい

15歳

性別 女 所属軍 ザフト

超がつくほどド天然、髪は肩までの長さで
片方だけを頭の右側で結んでいる、彼女はそれを自分の
チャームポイントと呼んでいる。

蒼神にいつもデート？に誘われているが本人は
遊びに誘われているとしか思っておらず、彼の言動は空回りしてい

る。

輪廻りんね 瑠璃るり

15歳

性別 女 所属軍 ザフト

黒髪で背中まであるそれを綺麗にストレートで伸ばしている
性格はとても下向きで蒼神がデートと称して遊びに連れて行くこと
しても

自分は地味だから。と自虐に走ることが多い。
しかし、オペレーターとしての実力とMSの操縦技術はすばらしく。
時々蒼神とフォーメーションを組む。

鮫哀さめあひ 卓すくろ

28歳

性別 男 所属軍 地球連合

なにかあつたらすぐに蒼神達を落そうとする。
その心理は不明。

ジョーカー・ギルレイ

24歳

性別 男 所属軍 ユニオン

『二代目グラハム・エーカー』と呼ばれるほどの実力者
性格は正義感が強く、曲がってることはあまり好きではない。
蒼神や咲神とは何度も衝突を繰り返すが

彼らの言い分も間違っではないかと、心の中では肯定している反面
『自分はユニオンの理念を貫く、それが俺の正義だ』といっている
自分もいる。

西条 あずね(さいじょう あずね)

16歳

性別 女 所属軍 なし

日本のMS工学を専攻している高校一年生。

蒼神に好意を抱くがザフトに入っていると知り自分も入ろうと
努力を重ねている。

性格は男勝りだが、蒼神の前だとかなり乙女に戻る。

相場 あいは 恵 めぐみ

15歳

性別 女 所属軍 なし

あずねと同じMS工学を専攻している高校一年生。

やはり蒼神に好意を抱くも自身がそれに気付いておらず
この気持ちがあるのかを探求中。

桜庭 さくらび 桜 ひな

16歳

性別 女 所属軍 オープ

性格はおとなしく、とてもしっかりしている
咲神に好意を抱いて頑張っ近づけるも
中々咲神に気付いてもらえない。

普段はおとなしいのに、咲神の前になると急に甘えん坊になる。

井豪 リョウヤ（いごう りょうや）

16歳

性別 男 所属軍 AEU

パトリック・コーラサーワと同等の

成績を収めるも本人はあまり興味を持たず、ただなんとなく戦っているようなかんじしている。

蒼神と咲神とは中等部のころの友達で、戦場で驚きの再開を向かえる。

正義感が強く回りに信頼を受けているが本人はそれを重荷と感じている。

『戦争なんかなくなればいい』そのなくしたいという気持ちが彼を戦場に駆り立てる。

登場人物紹介（後書き）

以上です・・・残りは原作のキャラなので・・・
つ。。。疲れたあ・・・

戦争の幕開け

「んあ？メール・・・？」

俺は自分のケータイから着ていたメールを見る。

それはザフトの教官からでありMSの適正結果が報告されていた。

「メールですかよ・・・」

まあ盗聴されるよりはマシか・・・どうせこのアドレスも秘密の回線とやらで繋がっているのだろうし・・・。

俺はそう思いながら付属ファイルを開いた。

そこに書かれていたのは、適正結果『A』、そして、俺がコーディネイターであることも記されていた。

「やっぱりか・・・」

ザフトにいる連中は俺達のような15、6のガキもいるけど普通に成人してる人やオッサンもいる。

だが、その大半はコーディネイターである。

コーディネイターとは簡単に言っちゃうと遺伝子操作された人間。ザフトはそれを行い成功している。

成功したものにはSEED<種>と呼ばれる・・・簡単に言えばスイツチのようなものが

心に芽生える、そして、それが一定の条件を超えると破裂し、一時的にとつともない実力を発揮することが出来る、MSで。

だから、俺にAが来たってことはコーディネイターであるというこの可能性が

かなり高まったということだ。

「まあ、事実は事実だし・・・問題ないっしょ!」
俺はお得意のお気楽思考に切り替えてこの後のことのメールを読んだ。

その内容は、明日、昼の0時にザフトの特別教室に來いとだけ記されていた。

「ふんっ、素っ気ねえな、おめでとうのーつくらい言えっの」
そう呟きながら、俺はザフトで知り合った女の子に連絡を入れた・

次の日、俺は自宅前で人を待っていた。
昨日連絡を入れた女の子だ。

「ごめんねえ〜まったあ〜?」

おっとりしながらもしっかり走ってくる女の子を発見。

彼女の名前は須藤 唯、同じコーディネイターの同い年。

「かなり待った、唯最悪」

俺はそっけない態度をとってテクテク先に行く

唯は口が「ガン」と言いながら

後ろをついてくる。

「ごめん!ごめんなさい!今日の髪留め何にしようか迷ってデエ
そっいいながらタダでさえ走って顔が赤いのに
涙目になるものだからもう見てられない。

俺は足を止め、唯に向き直り。

「大丈夫だよ、待ってない、っっていうか家の前だから」
そういつてハンカチを渡す。

唯はそれを受け取ると汗と涙を拭いた。

「あはは、ありがとう、それじゃいこ」

そういつて俺の手を引っ張る唯。

彼女は単純な天然だ、だからからかいがある。

そして、ザフトの特別教室につく、そこには俺と唯のほかにも人がいた。

長い、黒髪のアスリート……たしか輪廻 瑠璃だっけ？

ほかにはシン・アスカ、レイ・ザ・バレル、ルナマリア・ホーク
合計6人いた。

俺達は所定の席につき、教官が来るのを待つ。

「なあ、シン、お前も適正Aだったのか？」

俺はとなりに座るシン・アスカにそうたずねる。

「ああ、蒼神も？」

「うん」

などと会話をしていると、教官が来た。

<ガタガタ！>、俺達は教官が入るとともにたつて敬礼をする。

教官は「座れ」、とだけいつて話を始めた。

「まず、お前達は15や6という若さで適正Aを取った

だからまずは量産型だが、専用カラーのMSをもたせることにな
った」

<おおー>

周りがざわつく、へえ専用機ねえ……

「機体名はザクウオーリア・とグフィグナイトだ、今から呼ば
れるものは……」

そこまで言いかけたとき、地面が揺れた。

「つつ!」「なんだ!?!」「きゃあ!」

と、部屋から悲鳴が聞こえた、そして、窓から見えたものは。

緑色の飛行機を背中につけたMSに青色で両肩に大きな盾をつけた

MS、

最後に真っ黒で背中に翼のような突起物と尻尾のようなものがある

MS、

その三機が、いまここで暴れていた。

「なっ!カオス、アビス、ガイアだど!?!おい!どうなっている!

!」

教官は無線で連絡を取り合っている。

「シン・・・これって・・・」

「たぶんザフトの新型だろう・・・でもなんで・・・」

俺達はこんがらがった、教官が無線との連絡を終え

「お前達!早くあの戦艦に逃げろ!」

そういつて俺達をガレージの先、戦艦のある場所に避難しろ、といわれた。

俺達はその戦艦に死に物狂いで逃げた。

そして、ようやくその戦艦について中に入る。

俺達は指示通りの場所に行った、その途中に、

「戦えるものはMSで迎撃しろ!」

「ですがアレは我等の」

「かまわん!敵の手に渡るなら・・・」

と、会話が聞こえた、俺とシンはみんなを先に行かせてその会話をしていた人たちに

「俺達、MS動かさませよ」

「なんだ、お前達は」

「適正試験Aをとりました、階級はありません、シン・アスカです」

「同じく蒼神 恭です」

俺達は敬礼をする、そんな時、彼らから無線が届いた

「は？ギルバート・デュランダル議長！ご無事で！？は、はあ・・・
はい例の新型なら・・・

ですがパイロットが・・・はい？今その場に居るパイロットを
ですか？

しかしそれは・・・はい・・・いや、目の前に二人15、6歳の
子供が・・・はい適正はAです・・・ですが、いくらこの状況だ
から

といっても・・・はい、議長がそうおっしゃるのなら・・・」

無線を切って俺たちに向き直る、指揮官らしき人

「君達、MSの実際の稼働時間は？」

「俺は30分」

シンが答え、俺も続けて答えた

「俺は1時間弱です」

そして、何か悩むようにして、上官は俺達を発射ゲートに連れて行
った

そして、そこで見たものは、上半身、下半身、コアファイターだった
そのモニターに機体名が書いてある。

「機体名：インパルスガンダム」

「機体名：プロトインパルス」

「これは・・・」

俺達はその姿に眼を向けられていたときに

「蒼神くん、君のほうが稼働時間は多かったね？」

「え？あつ、はい」

「ならこちらに来た前、シンくんはあつちのコアスプレnderに」

「コアスプレnder？」

俺は疑問系で上官に聞いた

「コアファイターの名前だよ、さあ乗って！」

俺達はそのまま乗せられた、そこには『レッグフライヤー』『チエ
ストフライヤー』

と上半身、下半身の名前が現れている。

そこで回線が開く。

「シンくんは住民の避難を、蒼神くんは敵MSの捕獲、または迎撃」

「了解！」

俺達は演習どおりに機体を起動させ、発射カタパルトにセットする
それと同時に俺の心臓が高鳴りだす

<ドクン・・・>

本当に始った・・・怖い・・・

<どくん・・・>

でも、ここからは逃げられない・・・

<ドクンドクン・・・>

戦争のない世界を・・・争いのない平和を作るんだ・・・

<ドクドクドク・・・>

そのための・・・戦いだ！

「蒼神 恭！コアスプレnder！行きます！！」

俺は勢いよくブーストを加速させ、一気に発進させる。

そこでまた回線が開く。

「テエストフライヤーとレッグフライヤーをコアスプレnderと合体させて！

その後にはソードシルエットを換装してください！」

どうやらあの船のオペレーターからだった、俺は操縦に集中しながら

「了解、チエストフライヤー、レッグフライヤードッキング開始！俺はコックピットの中の装置を操作して合体させる。」

次の瞬間、まだエネルギーのない灰色のインパルスガンダムが完成した

そして、発射されたソードシルエットを

背部に接続し、エネルギーがチャージされる

インパルスガンダムの部分箇所が白と赤色のメインカラーとなりシルエットのサイドに大型の剣

『エクスカリバー』が二つセットされていた。

俺はそれの両方をとり、それぞれの柄の部分に接続させ、大きな

ソードにする、ソードの片方の刃の部分からビームが放出される。

俺はその機体、『ソードインパルスガンダム』で、
例の三機、カオスガンダム、アビスガンダム、ガイアガンダムに向
かった。

ガンダム

「うおおおおおー!!!」

俺は大型のエクスカリバーをまずは緑色の機体、カオスガンダムに向けて

切りかかった、だが、流石は新型、紙一重で避けられる。

もつとも、実戦じゃ俺のほうが経験が低すぎるか・・・

俺はエクスカリバーを持ち直し、周りを見た。

周りはすでに迎撃に出てやられたザクやデイン、ジンなどの残骸が広がっていた。

そしてそれは、居住区にまで広がり、被害は拡大していた。

レーダーの探知によりシンの乗る、プロトインパルスを確認できる。救助は順調、といったところだ、だが、それより手前の民家に、下敷きになって

絶命した人たちがいる、そのそばに泣きじゃくる子供も確認できた。

「・・・・・・・・つ・・・・・・・・」

俺は下唇を強くかみ締め、エクスカリバーを構え

「どうして・・・」

そこでようやく、カオスガンダムからも音声が聞こえた。

「あ?」

「どうしてこんなことをするんだ・・・お前達は・・・そんなに争

いが好きなのか!!」

叫びながらインパルスを走らせる、そして、そのまま切りかかる

「そんなやつ等は、超絶に吹き飛ばせ!!」

だが、俺の剣はMAに変形したカオスには当たらなかった
上空に逃げた、そして、それと入れ替わりに今度は黒いガンダム。
ガイアガンダムがこちらに向かってきた。

「つちい！次から次へと!!」

俺はそのまま目標をガイアに変更、そのまま切りかかる

だが、ガイアのMS形態はスピード系の陸上タイプ
かなり早く、なかなか大きな剣じゃ当たらない。

「ちよろちよろしてんじゃねえぞ!!」

俺は今度はエクスカリバーを二つに分離し、切りかかる
先ほどと違い、少しだけ速度が速くなる、ガイアはMSに戻り
ビームサーベルで応戦する

「お前も・・・私を殺すのか・・・」

急に音声が聞こえた、そして、その声にも驚いた

女の子!?

「お前も私をおおお!!」

ガイアがインパルスを蹴り飛ばしてビームサーベルで切りかかってくる

俺は体勢を崩してしまい一度剣を捨ててそれを避ける、

だが、それが最大のミスとなった、エクスカリバーをガイアに取られたのだ

「しまったっ！」

俺は仕方なくこのまま応戦しようと考えた、だが、目の前にザクの残骸がある。

その手にはビームトマホーク。

「ラッキー!!！」

俺はそれをザクから奪って一気に間合いをつめる

そして、切りかかる寸前。

ガイアはエクスカリバーを捨てて上空に逃げた

「なに!？」

見てみれば青いガンダム、アビスガンダムもカオスとガイアとともに上空に逃げる。

「なんだ・・・どうすればいいですか？」

俺は回線を開いてでたずねる

回線から女の人の声がした

「出来れば戻って着てください、ミネルバはこれより発進します」

「了解」

俺はその指令を受けて戻る

もうシンは戻っており、機体の下で俺を待っていた

「わりいわりい、ちょっとミスった」

そういつて笑いかける、シンも笑う

そして、艦長室に俺達は呼ばれてそこへ向かう。

そこには艦長と思われる人、それから何度もＴＶで見た。

ギルバート・デュランダル議長がそこにいた。

「やあ、君たちが、プロトインパルスとインパルスガンダムに乗ったというのは」

そういつて笑いかけて手を差し出してくれる

俺はその手を握って握手をした

「お逢いで着て光栄です、自分がインパルスに乗りました、蒼神
恭です」

「同じくプロトインパルスに乗りました、シン・アスカです」

シンも議長と握手を交わす

「それで……どういう用件でしょう？やっぱり僕達おろされるんですか？」

すると、艦長のタリアはふふふ、と微笑み

「その逆よ、議長の推薦で二人はこれからその機体のパイロットよ」

「え？」「マジで……？」

俺とシンは驚愕しながら議長を見た

議長は笑いながら

「いやあ、あんな戦い方をするパイロットはそんなにいないからね、君たちが

いいていうならお願いしたいのだが……」

「是非やらせてください！」「」

俺達がハモツた……

そして、自室にしてもらった部屋に戻る俺とシン、どつやら同室のようだ。

「やったな、専用機、しかもガンダムだぜ？」

俺は喜びをあらわにしながらシンに言った。

シンも笑いながら

「ああ、俺達って相当スゲーじゃん！」

そういいながらたがいに寝転ぶ

シンはおもむろにケータイを取り出す

ピンク色の女物だ。

「それは？」

俺は気になり聞いてみる

「ああ、マユの、俺の妹のだよ、以前の戦争で・・・死んだんだ」

「え・・・ご、ごめん」

「いや、いいんだ、でもそのとき決意したのさ、俺が戦いを終わらせるって」

そういつてシンはケータイを強く握り締める

「俺も、その考えには賛成だな」

そういつてロキから貰った鍵を出す

「それは？」

シンは不思議そうに聞いてくる

「お守り、オーブに行っちゃった奴がくれたんだ、あいつ元気かなあ・・・」

「戦場で会わないようにしないと、敵として」

「あはは、不吉なことを言つなよ、でも、できれば敵対したくないな・・・」

そういつて俺達は笑いあつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6643y/>

機動戦士ガンダム <種と覚悟が運命に惹かれた時>

2011年11月22日01時12分発行